

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25282186

研究課題名(和文) 体育科教育におけるスポーツ活動システムの自律的形成と体育授業の実践的方法論

研究課題名(英文) The Instructional Methodology for Autonomous Formation of Sports Activity System in Physical Education.

研究代表者

森 敏生 (Mori, Toshio)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：30200372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,700,000円

研究成果の概要(和文)：体育科教育における教授-学習の対象をスポーツ活動システム(Sports Activity Systems :SAS)と捉える意義を論じ、その自律的形成を教授学的に媒介する原理を、SASの文化的特質、階層的位相、内的矛盾の解決という観点から検討した。

SASの自律的形成をめざす体育授業の実践的方法論は次のように結論づけた。文化的により進んだSASを教材として構成する、教材と実際のSASとの矛盾を学習課題として対象化する、「媒介する手段・技術」「規制するルール」「目標・意味」という構成要因を相互に関連づけて対象化する、矛盾の解決過程において陶冶と訓育の両側面から自律的形成を促す。

研究成果の概要(英文)：In our study, we discussed that it was significant to understand Sports Activity Systems (SAS) as objectives in physical education and examined the didactical principles to form SAS autonomously from the points of views of the cultural characteristics and the hierarchical phases and solutions to internal contradictions of SAS.

The instructional methodology for autonomous formation of SAS in physical education is summarized as follows: To organize the culturally advanced SAS as subject matter; to objectify contradictions of the subject matter and real SAS; to objectify with each other components of SAS such as "instruments", "rules" and "meaningful object"; in the solution processes to contradictions of SAS, to encourage autonomous formation of that with both instruction and education.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育科教育 運動文化論 スポーツ活動システム 自律的形成 実践的方法論 学習活動の対象化 矛盾の解決過程 陶冶と訓育

## 1. 研究開始当初の背景

現行の学習指導要領では体育が保障すべき能力や資質が具体的目標として示されている。この指導要領が2011年度より完全実施段階に入ったことから、今後は、体育で獲得される能力や人格的資質をどのような体育授業方法によって実現するのが実践・研究の焦点となる。

他方、最近の子どもの体力・運動能力をめぐっては運動習慣が二極化する傾向にある。体育実践における学習を日常生活や生涯にわたる生活と関わらせ、学習者自身の自律的取り組みにしていくことが課題となっている。

このような問題意識はわが国だけにとどまらず、体育という教科に新たなより包括的期待が寄せられている。例えば、国連の「スポーツと体育の国際年」を受けて、生涯にわたるスポーツ参加やライフスキルの発達を含む身体的リテラシー (Physical Literacy) の発達を促すことに関心が向けられている。

我々はこれまでの研究において、「活動システム」論を概念的枠組として体育実践の理論的・実践的課題にアプローチしてきた。体育が育成すべき活動の実践課題は、「ともにうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」「ともに意味を問い直す」という相互に関連する3つの内容で定式化できる(「3とも」と称せられる)。

このような体育における活動システムを分析枠組に小・中学校の体育授業実践における児童・生徒の学習過程を検討してきた。そこでは、学力・リテラシーと人格形成をつなぐ実践的可能性と実践方法上の課題が示唆された。

## 2. 研究の目的

以上の学術的背景とこれまでの研究成果を踏まえて、本研究では体育の教授-学習の目的を学習主体によるスポーツ活

動システム (Sports Activity System、以下 SAS) の自律的形成と概念化し、その実現を図る体育授業の実践的方法論を明らかにしようとするものである。

## 3. 研究の方法

かかる研究の目的に対して以下のような3つの研究課題のもと、7つの作業課題を設定してアプローチした。

研究課題の第一は、体育の教授-学習の対象として SAS という概念的枠組みを明確にすることである。

研究課題の第二は、学習主体による SAS の自律的形成という目的規定の意義づけを図ることである。

研究課題の第三は、かかる目的を志向・実現する体育授業について、その実践的な原理原則を明らかにすることである。

作業課題 社会における多様なスポーツ実践に関わる、SAS の具体的様態を明らかにする。

作業課題 スポーツの競争性の意味を相対化し SAS の自律的形成のめざす方向性を探る。

作業課題 国内外の体育科教育論を比較参照し、SAS の自律的形成という目的規定の意義づけを図る。

作業課題 SAS の自律的形成のプロセスについて演繹的に仮説を立てる。

作業課題 学校の教科の内容・教材となる SAS を特徴づけ、体育の教授-学習の対象としての規定を図る。

作業課題 SAS の自律的形成をめざす体育授業の実践的方法論を明らかにする。

作業課題 先駆的な体育実践の報告や記録を分析し、体育授業の実践的方法論の実践的妥当性を検討する。

## 4. 研究成果

【スポーツ文化実践の多様性・複合性】

社会におけるスポーツ文化実践の目的・動機は多様であるが、それらは幾つかのタイプに集約できる。具体的には、何らかの競技への参加に動機づけられ競技パフォーマンスの向上をめざす活動タイプ、心身の健康や機能回復・開発・向上をめざす活動タイプ、その時々ゲーム性の楽しみや社会的交流に動機づけられた活動タイプ、一定の文化的様式をもつ身体技法や身体表現に動機づけられた活動タイプなどである。こうした目的・動機のタイプの区分は相対的であり、現実のスポーツ文化実践の具体的な様態では諸タイプが様々な重み付けをもって相互に浸透しあっている。年齢、性別、障がいの有無を越えて享受主体が広がってきた現代のスポーツ状況を見ると、これまでの競技性を目的・動機とする活動タイプを支配的・中軸的なものと見なす「スポーツのとらえ方」の再考が迫られている。身体性、プレイ性、競技性、共楽性という次元から多様なスポーツ文化の特質を再考することも提案されている。現代の社会におけるスポーツ文化実践の活動タイプに見られる多様性と複合性は、活動主体の生涯に渡るスポーツ実践の個性的かつ継続的追求を可能にするスポーツ文化の価値や特質の豊穡性を意味していると考えられる。

#### 【体育科教育論における目的、目標・対象】

学習指導要領が示す体育科教育の目標では、「適切な運動の経験」「運動の合理的実践」と「運動や健康・安全についての理解」を内容として、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」の育成を目標に、「健康の保持増進（のための実践力の育成）と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む」ことをめざす活動が位置づけられている。

運動文化論に立脚する体育科教育では、文化の総体（技術性、組織性、社会性）に関する技能と認識、科学的な認識方法、民

主的な合意形成と組織運営の方法を媒介（内容）として、主体的・共同的（自治的）に文化を獲得・創造する実践力を目標に、運動文化（スポーツ）の権利主体となることをめざした活動が追求されている。

TGfUのPhysical Literacy論では、知識と理解に基礎づけられた批判的思考や意思決定と問題解決、技術的・戦術的スキルの適用能力、他者を包摂し他者と協同して相互の身体活動の喜びを共有・創造する社会的スキルの発達を目標にして、生涯にわたる最適なレベルの身体活動を持続することをめざす活動が求められている。

これら三者には生涯にわたる社会生活へと発展的につながる実践力の育成を図るという点で共通性がある。しかし、現実の社会生活と体育科教育の目標や内容との相互の関連性や、活動主体の描き方（主体者像）に違いが見受けられる。学習指導要領は主体の運動や健康への志向性やそれぞれの健康増進の実践力と体力向上に重点が置かれており、主体自身の態度・姿勢に重きがおかれている。その分、現実社会と主体の向き合い方・関わり方が弱くなっている。それに対して、運動文化論やTGfUのPhysical Literacy論では、主体の知識・理解や認識の広がりを重視し、批判的思考や意思決定、異質協同の社会的スキルや民主的・自治的実践力など、主体が現実社会と向き合いながら生涯にわたる活動の有り様を自己決定できることが目ざされている。

#### 【SASの自律的形成】

前述のように、文化の特質及びそれを反映した活動の目的・動機の多様性・複合性は、生涯にわたるSASの継続的追求を可能にする文化的豊穡性を成す。SASの自律的形成の内実は、こうした文化的特質とそれを反映した目的・動機を、その時々の実践（活動）の実情に応じて自らが自発的に形成していくことを意味する。

このようにスポーツ文化実践は人間的諸能力と資質を開発・向上させる特質を機能的に内包しているが、それは3つの階層的な活動領域において現実化されている。第一は、トレーニングや練習における身体運動能力、技術・戦術的な能力の形成と、試合における能力の発揮・表現の領域である（技術的領域）。第二は、一定の社会集団や組織単位で、練習や試合あるいは競技会・発表会などを計画・企画し、規則・ルールや実施要領について合意を図り決定し、さらにこれらを実施運営する領域である（組織的領域）。第三は地域や社会生活においてスポーツ活動が日常的・継続的に実施できるような社会的環境・条件の構築・整備の領域である（社会的領域）。したがって、SASの自律的形成の内実とは、こうした階層的な活動領域の全体・全局面に自らの意志でアクセス・参画し、自らの意志や要求を他者と協同しながら反映させていくことである。

活動の主体は、スポーツの多様で複合的な目標・対象を志向しつつ、3つの階層的な活動領域にコミットし、そこでの固有のコミュニティにおいてルール・規範にそって、あるいは役割・分業を担って活動を展開する。現実の活動場面において主体はこれらの活動システムの構成要因間の様々な矛盾に直面し、矛盾の解決を図るべく構成要因間の新たな関係を構築していかなければならない。SASの自律的形成とは、こうした内的矛盾の克服による活動システムの質的發展であり、それは活動の歴史的（系統発生、個体発生的）な様式の変化として特徴づけることが可能である。

#### 【SASの教授学的媒介と編成原理】

(1)全体性・体系性・統合性（カリキュラムレベル）

スポーツ文化実践（活動システム）の全体性・体系性・統合性のエッセンスがカリ

キュラム編成において反映されることが必要である。文化実践としての活動の目的・動機の高多様性・複合性と、活動の対象となる客体としての文化の構造的全体性を反映しつつ、それらを活動の課題追求において体系的に統合化していくカリキュラムが構築されていかなければならない。そのベースが、「ともにうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」「ともに意味を問い直す」という相互に関連し合う3つの課題である。ここでは、技術・組織・社会の全体的階層性をもつスポーツ文化実践の活動領域の広がり（それを反映した文化内容、教科内容の全体性・総合性）が視野に入れられている。また、活動の対象性と共同性、目的・動機の高多様性や拡張性、課題追求の相互関連性（体系性・統合性）が内包されている。「3とも」には相互に関連する発展的系統があり、課題追求と階層的な領域の重み付け（配分）が発達課題に則して系統的に変化する。

(2)体育における陶冶と訓育の統一（単元・授業展開レベル）

「うまくなる」「楽しみ競い合う」は技術・戦術内容、練習の内容と運営方法、競い合いの方式や規則とゲームのルールなどの認識・獲得と活用といった陶冶的側面をもっている。そこに「ともに」という異質共同・協同の関係性が前提となることで自己・他者関係の形成が陶冶と不可分に求められ、さらに「ともに意味を問い直す」という相互的な価値反省的・価値創出的課題が据えられることで、陶冶そのものの訓育的意味づけが図られることになる。

(3)体育の指導と学習における「ともに意味を問い直す」の重要性

体育実践ではまず学びの対象(教材)をめぐって、「ともにうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」活動が展開される。その中で、既習事項におけるつまずきや、生活を背負

った子どもの価値観と学習対象（教材）の間に衝突や矛盾が生まれる。ここにこそ「ともに意味を問い直す」学習の契機が存在する。教師はつまずきや衝突を「ともに意味を問い直す」を契機に、子どもたちにとって抜き差しならない問題として「共通課題化」し、子どもたちの対話を組織して異質協同のグループ学習を展開する。（図1）

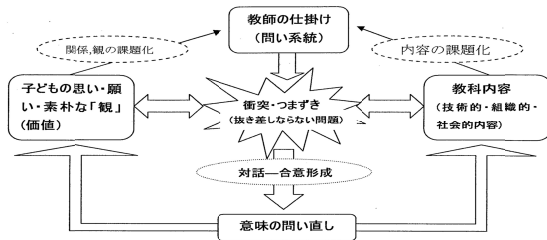


図1. 「意味の問い直し」をめぐる授業展開

### 【体育授業の実践的方法論】

以上のような考察から、SASの自律的形成をめざす体育授業の実践的方法論を次のように導いた。

第一に、教師は自らの授業構想をもとに子どもの目標・対象となるSASを教材として構成する。その際、目標・対象となるSASは学習者に未達成の文化的により進んだ活動として構成される。

第二に、教授-学習過程のもとで教材(学習対象)として構成されたSASに拘束されつつも、文化的に未達成の要因を内包する現実の子どものSASはそこから逸脱せざるをえない。こうして実際の子どものSASは教材が要求する拘束要件とその要求を満たし得ない逸脱

要因の間で矛盾を顕在化することになる。ただしSASの矛盾は教師の指導のもとで学習課題として対象化されることで顕在化する

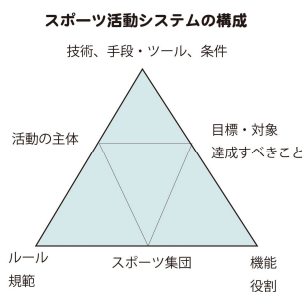


図2. SASの構成

る。この「学習活動の対象化」という点に体育に固有の重要な授業実践の方法原理がある。

第三に、教授-学習過程において生じてくるSASの矛盾は、「活動を媒介する技術・手段」「活動を規制するルール」「活動がめざす目標・意味」というSASの構成要因に関わる矛盾として立ち表れる(図2)。ただこれら3つの活動構成要因は実際には相互に関連しあっている。そのため「学習活動の対象化」という教師の指導的な手だてによって、ある構成要因の矛盾に焦点化し、それを顕在化していく必要がある。

第四に、教授-学習過程におけるSASの矛盾の解決過程(解決行為)においては、上述のような3つの活動構成要因の系統的な焦点化、学習の節目や新たな課題の創出などによる焦点の転換・展開、学習の概括的振り返りによる相互の関連づけを経て、SASの自律的形成が図られる。SASの矛盾の解決過程は、活動要因間の関係を再組織化するなかに、技術やルール、活動目標の獲得など陶冶的側面があると同時に、他者との関係で自己を省察する、自分が所属する集団のまとまり具合や人間関係のあり方や役割配置を問い直すなど、訓育的側面も持っている。よって、陶冶と訓育の統一が実践的方法論においても重要な課題になる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 34 件)

- (1) 森敏生(2013)、豊かなスポーツ教養が体育授業を変える、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第32巻第3号、8-11.
- (2) 田中新治郎(2013)、文化としてのスポーツの教育力を問い直す、査読無、「運動文化研究」Vol.30、1-5.
- (3) 中西匠(2013)、運動会の教育的価値と実践課題 実践事例から読み解く、査読無、「運動文化研究」Vol.30、8-15.
- (4) 森敏生(2014)、生活体育論の実践研究 その実像と現代的意味を問う(その1)、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第33巻第

2号、34-37.

(5)森敏生(2014)、子どもをつなぐ教材づくりの視点、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第33巻第9号、12-15.

(6)森敏生(2014)、スポーツにおける競争の文化的特質、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第33巻第10号、8-11.

(7)久保健(2014)、生活と文化をどう結ぶか 制野俊弘の「みかぐら」実践(中学校)から考える、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第33巻第1号、18-21.

(8)丸山真司(2014)、体育カリキュラム開発の主体としての教師、査読有、「体育科教育学研究」第30巻第2号、73-80.

(9)田中新治郎(2014)、新たな運動文化論にむけて(1)、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第33巻第8号、22-25.

(10)久保健(2015)、陸上競技(陸上運動)の学習指導要領の今日的課題、査読無、「体育科教育」第63巻第3号、10-13.

(11)田中新治郎(2015)、運動文化論を自己点検する、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第34巻第1号、12-15.

(12)森敏生(2015)、運動文化論における身体・身体形成の位置、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第34巻第5号、8-11.

(13)丸山真司(2016)、「体育は何を教える教科か」を問い直す、査読有、「日本教科教育学会誌」第38巻第4号、111-116.

(14)石田智巳(2016)、体育実践にナラティブ・アプローチを読む、査読無、「体育科教育」第64巻第1号、50-53.

(15)中瀬古哲(2016)、保育実践における体育指導、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第35巻第1号、66-67.

(16)久保健(2016)、「からだ」は体育の中でどう見られてきたか、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第35巻第1号、8-13.

(17)則元志郎(2015)、体育実践における「わかる」内容の検討、査読無、「たのしい体育・スポーツ」第34巻第6号、22-25.

〔学会発表〕(計 9 件)

(1)則元志郎、馬渡光二、ボールゲーム教材における戦術学習内容の検討、九州体育・スポーツ学会、2013.9.15、九州共立大学.

(2)丸山真司、教師による体育カリキュラム開発方法 スクール・ベイスト・カリキュラム開発に着目して、第65回日本体育学会体育科教育専門分科会、2014.8.27、岩手大学.

(3)森敏生、中瀬古哲、丸山真司、海野勇三、中西匠、石田智巳、体育科教育における学習の複雑性と多面性 スポーツ活動システムの矛盾の解決過程に着目して、日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会、2015.9.15、日本体育大学.

(4)丸山真司、「体育は何を教える教科か」を問い直す、日本教科教育学会第41回大会、広島大学.

〔図書〕(計 8 件)

(1)中瀬古哲(2013)、『子どもの発達と運動会 就学前体育カリキュラム論序説』、かもがわ出版、108頁.

(2)久保健(2014)、体育 運動文化を学び、身体運動能力を育む、教育科学研究会編『学力と学校を問い直す』、かもがわ出版、304頁.

(3)丸山真司(2015)、『体育のカリキュラム開発方法論』、創文企画、286頁.

(4)森敏生(2015)、武蔵野美術大学身体運動文化研究室編『スポーツ・健康と現代』、武蔵野美術大学出版局、238頁.

(5)丸山真司(2016)、日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのか』、文溪堂、119頁.

(6)久保健(2016)、『これでわかる 体ほぐしの運動』成美堂出版、176頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

特になし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

森 敏生 (MORI TOSHIO)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：30200372

### (2)研究分担者

中瀬古 哲 (NAKASEKO TETSU)

神戸親和女子大学・その他の研究科・教授

研究者番号：00198110

丸山 真司 (MARUYAMA SHINJI)

愛知県立大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：10157414

中西 匠 (NAKANISHI TAKUMI)

武庫川女子大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：10259608

田中 新治郎 (TANAKA SHINJIRO)

武庫川女子大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：70197432

海野 勇三 (UNNO YUZO)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：30151955

久保 健 (KUBO TAKESHI)

日本体育大学・その他部局等・教授

研究者番号：60125698

則元 志郎 (NORIMOTO SHIRO)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：90136698

石田 智巳 (ISHIDA TOMOMI)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：90314715

### (3)連携研究者

なし